

大阪教育大 ○今村律子 奥窪朝子 岸城中 根来ひとみ
 岡山南高 藤木恵美

【目的】 トータル・ルックの時代となり、おしゃれの仕上げとして帽子が注目されるようになった。冬期に関しては、防寒が主たる目的であるが、演者らが女子学生を対象としたアンケート調査から、帽子は約7割の人が所有しているにもかかわらず、利用頻度は1割弱に過ぎないことがわかった。一方、帽子の防暑効果についてはいくつかが報告されているが、防寒に関する近年における報告はほとんど見あたらない。そこで本研究では、着帽実験を行い、帽子の有無や種類による保温効果の検討を試みた。

【方法】 被験者は健康な女子学生9名で、予備室(23℃)において、快適と感じる衣服を着用し、皮膚温の安定を確認した後、18℃の環境下で次の各種供試帽子を着用し、40分間の椅座安静状態で皮膚温12点、舌下温、全身及び局所温冷感・快適感を測定した。供試帽子は、ベレー、フード、スキー帽及びスカーフである。また、スキー帽については、耳介・頭頂部の開口の有無についても検討を行った。冬期の帽子に関する調査は、1988年11月に女子学生を対象として実施した。有効回収票は200票であった。

【結果】 ①着帽することにより、被覆部位の皮膚温が非着用時に比べ有意に高値となり、各帽子の保温効果が認められた。②その保温効果は、帽子の種類によって異なり、被覆面積及び部位との関連がみられた。ベレー以外では、被覆部以外の部位の温冷感においてその波及効果が認められた。③同素材・同被覆面積の場合(スキー帽)、耳を覆うことによって保温性が大となった。④以上の着帽実験結果は、アンケートに基づく帽子の種類別にみた保温効果の実態とも一致した。